



Pure 純 No.199 Pacific パ Sep.2018

純パの会会報『純パ』第199号

2018年9月29日発行 / 発行:純パの会

<新・私のパ歴書>

いわゆる「近鉄バファローズ」物語

大橋 弘志(東京都江戸川区)

皆さんこんにちは(こんばんは)!

私は、1961(昭和36)年12月2日生まれの男性56歳です。福島県出身で福島県立福島商業高校OBです。「古豪」という表現になりますが、高校野球ファンならばもしかしてご存知かも知れませんね。

なぜ東北の片田舎、文字どおりの山の中に生まれた人間が大阪の「人気がなくプロ野球には最も適さない環境にある球団」近鉄バファローズのファンになったのか、そのあたりをまとめて発表したいと思います。少々想いが強すぎて文章が激しく揺らぐ可能性がございますが「純パの会」の皆様ならおわかり頂けるものと勝手に考えております。目をつぶってすべてお許し下さい。

なお、私は「純パの会」発足当時の会員でその後退会し、久々に出戻った(20年ぶりぐらい)という立場の人間です。

*

近鉄バファローズを最初に知ったのは、1969(昭和44)年のドラフト会議に遡ります。小学生が情報を得るのは、新聞やテレビがやっとの時代ですので、「太田幸司」の名前と顔が一致するまで少し時間がかかりました。ただし、ナイター中継に登場することは皆無。翌年のオールスターの試合に出てきたブラウン管内の太田幸司は、正直なところ読売巨人軍の大エースである堀内恒夫の100倍は格好良い存在でした。

その当時は、テレビ中継の頻度=プロ野球チーム好き度の時代なので、純粋に読売巨人軍がひいきチームであり、1番高田繁、2番土井正三のコンビがお気に入りでした。近鉄の話題が一般紙(地方紙)のスポーツ欄を飾ることはなく、万年最下位チームで、唯一のスターとして「鈴木(啓示)」の名前がチラホラぐらいには登場した記憶があります。正直にお話をしますと、小学校の低学年時代なので「ちかてつ」と呼んで、中学生の兄に小馬鹿にされた記憶があります。

少しだけ大人になった時、ペナントレースとか、セ・リーグとパ・リーグの違いとか、日本シリーズの意味が解りかけた頃ですが、後樂園球場で山田久志が世界の王貞治にホームランを打たれたシーンをテレビ中継で見ました。それも小学校の職員室にあるテレビで、